

🎹 総会報告 🎹

第5回通常総会

2016年5月14日、松本記念音楽迎賓館にて第5回通常総会が行われました。

2015年度の活動報告、2016年度の予算案・事業計画等の各議案が審議され、それぞれ承認されました。

今年度は、来春の「年報」創刊に向け、発行準備が本格化します。また、第4期会長選挙も行われます。

協会の活動充実のため、今後とも会員の皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い致します。

2016年度 運営委員

会長：久保田慶一

運営委員：秋山裕子、有橋淑和、伊藤一人、小川絢子、加久間朋子、乗形亜樹子、高橋ナツコ、

副会長：乗形亜樹子

土居瑞穂、坂由理、廣澤麻美、森洋子、山縣万里、山本庸子、渡邊順生

● 会則等の主な改正点

① 会費について（2016年5月14日施行）

- ・再入会金を廃止しました。
- ・入会時の会費の月割りを廃止しました。
- ・会費滞納により自動退会された方が再入会する場合の取扱を定めました。

② 会員区分について（2017年4月1日施行）

会員区分の名称を「正会員」から「会員」に、「一般会員」から「サポーター」にそれぞれ改めます（法人・団体会員は変更ありません）。さらに「正会員」に必要であった要件を廃止し、チェンバロと関わりをもち、本会の趣旨に賛同する方であればどなたでも「会員」になることができるようになります。

③ 会長選挙について（今年度執行の選挙より適用）

候補者が一人のときは選挙を行わず、無投票当選とすることとしました。

● 第4期会長選挙について

- ・選挙管理委員会（委員長：副嶋恭子）が発足しました。選挙日程等につきましては、ホームページ等でお知らせします。
- ・選挙権を有する方は、は2016年4月1日に正会員であった方です。
- ・第4期会長の任期は、2017年5月の総会から2020年5月の総会までです。

- 協会の運営に携わりたい方を募集しています！詳細は、事務局へお気軽にお問い合わせください。

🎹 会計より大切なお願い

- ① 協会への登録名と、年会費等の振込人名義が異なる場合（ご家族名義の口座からのお振込等）は、必ず事務局へご連絡下さい。
 - ② メールアドレスをお持ちの方で、これまでご住所のみ登録されていた方は、ぜひメールアドレスのご登録をお願い致します。
 - ③ メールアドレスを変更された場合は、必ず事務局へお知らせ下さい。
 - ④ 賛助金をお振込下さる場合は、年会費と区別できるよう、その旨メールにてご連絡下さい。
- ※ 2015年と2016年の年会費が未納の方で、メールアドレスのご登録がある方には、2016年7月中に振込のお願いをお送りしました。入金を確認できない場合、来年3月で会員資格が失効してしまいますので、お心当たりのある方は早めにお手続き下さい。入金確認後、今年度のパスワード入りの会員証を郵送致します。

🎹 事務局より

事務局：japan.harpsichord.society.jp@gmail.com

- ・メールアドレスや住所変更のご連絡、年会費のお支払い状況に関するお問い合わせは、事務局までお願い致します。
- ・最新のメールマガジン（9月19日付 第52号）を受信できていらっしゃらない方は、ご連絡下さい。

🎹 例会予告（詳細は協会ホームページをご参照下さい）

例会係：cembalo_events@yahoo.co.jp

- ・10月15日（土）14時～ 第21回例会「フリーコンサート」 於：松本記念音楽迎賓館（東京）
- ・11月10日（木）18時～ 第22回例会「チェンバロの名器を訪ねて」 於：札幌市教育文化会館（北海道）

5月14日、15日に世田谷の松本記念音楽迎賓館で、日本チェンバロ協会主催「チェンバロの日！2016」が開催された。5回目となる今回は、生誕400年を迎える作曲家フローベルガーにちなんだ講座やコンサート、愛好家の方々によるフリーコンサート、展示販売等々が行われ、来場者は2日間で述べ151人を数えた。(伊藤一人)

- 1日目 5/14 -

♪ 久保田慶一レクチャー

日本チェンバロ協会が毎年5月に開催している「チェンバロの日！」も、今年が5回目となり、ようやく定着してきた感がある。今回は、生誕400年を迎えたフローベルガーをテーマに据えて、レクチャーやコンサートが行われた。

2日間の催しのトップバッター、会長の久保田慶一・国立音楽大学教授によるレクチャー「歴史と現代におけるJ.J.フローベルガー」は、私のように長年フローベルガーに取り組んで来た者でも思わず目から鱗が落ちるような啓発的な内容であった。このレクチャーでは、2002年に発見された『ベルリン・シンクアカデミー写本』という、フローベルガーの楽譜資料の中でも特別に価値の高い筆写譜の内容や来歴が紹介された。この写譜は、恐らくフローベルガーからヴェックマンに贈られた自筆譜から直接筆写されたもので、フローベルガーの最高傑作と目されるラメントやトンボーのスタイルで書かれた傑作群の、真の姿を伝えているという点で、世界のチェンバロ界にセンセーションを巻き起こしたものである。

また、このレクチャーにおいて、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハの周辺でフローベルガーの作品の写譜が盛んに行われていた、という、今までほとんど問題にされたことのない驚くべき事実が明らかにされた。フローベルガーのラメントやトンボーは、「個人的な音楽」という創作姿勢においてロマン派音楽を200年近く先取りするものであり、そのような作品群と前ロマン派の領袖とも言うべきC.P.E.バッハとの結びつきが明らかにされれば、ドイツ音楽史の理解に新たな光を投ずることになるであろう。(YW)

♪ 廣澤麻美コンサート

開場後、瞬く間にお客様で溢れ、一気に会場が期待と熱気に包まれる。青と黄色のステンドグラスが午後の光に照らされる中、東京古典楽器センター所有：A. ウッターソン氏製作のイタリアンと、松本記念音楽迎賓館所有：安達正浩氏製作のフレンチ、2台の楽器が用意され、銀色の涼しげなドレスで廣澤麻美さんが登場。「天へ、地へ～謡蕩うフローベルガー」と題したコンサートが始まる。

トッカータで鮮やかな和音が部屋中に鳴り響く。音の群れを操りながら進み、2曲目のブルは、圧倒的なテクニックと躍動感に満ち溢れた演奏を披露。合間にコスモポリタンであったフローベルガーや作品についての興味深い話があり、次の曲に対する期待が膨らむ。次にトンボーの第1音目が響いた瞬間、それまで華やかだった空気が一転。作曲家本人が直面した死に思いを馳せる。演奏後、「晴れた日には似合いませんね」と奏者が吹き、笑いととも張り詰めた空気が解けていく。和やかになった後は、フローベルガーと親交のあったルイ・クープランの組曲。明るくしなやかな旋律が実に心地よい。そして「死を悼むということには色々な形がある」と述べて演奏に入ったフローベルガーのラメント。最後にスーッと真っ直ぐ天へ登り、シーク、クーラント、サラバンドと舞曲が続く。大きな拍手に包まれてコンサートが終わり、フローベルガーが自ら音楽で自己紹介をしたような親しみやすい午後のひとときとなった。(TT)

♪ 大塚直哉コンサート

「à l'imitation de Mr.Froberger ～フローベルガーに倣って」というタイトルのもと、フローベルガーによって人気を博した組曲のスタイル、そして彼の精神を引き継いだドイツ人の作曲家たちの作品を集めたコンサートが行われた。楽器は山野辺暁彦氏製作のクラヴィコード、横田誠三氏製作のフレンチチェン

バロを使用した。

演奏曲はJ.J.フローベルガー：マイヤー嬢に寄せて(クラヴィコード)、L.クープラン：組曲 イ短調(チェンバロ)、G.ベーム：組曲 へ長調(クラヴィコード)、J.S.バッハ：最愛の兄に寄せるカプリッチョ(チェンバロ)、シャコンヌ イ短調(チェンバロ)の5曲。

当日はたくさんのお客様で賑わっており、Bホール会場も予備の椅子を使用するほどの盛況ぶりだった。そのため、席は演奏者のすぐ後ろや真横、果てには奏者の向かいにあり、通常よりも大塚氏の息遣いから指使い、細かな表情まで感じとることができ、観客はまるで自分一人に向かって演奏してもらっているような、特別な空間で演奏を楽しんだのではないだろうか。クラヴィコードの演奏は普段あまり機会がないため興味深く、特にベームの組曲ではチェンバロとはまた異なる温かみのある音色で旋律の美しさを堪能することができた。そして最後のバッハでは大塚氏のエネルギーに溢れた演奏に観客も皆前のめりとなり、興奮と熱気に包まれてコンサートが終了した。(MS)

♪ 久保田彰レクチャー

“チェンバロは16世紀にイタリアで発明されたといわれるが、本当だろうか？”15世紀にもわずかながらチェンバロの痕跡は存在し、久保田彰氏の近年の研究である中世の楽器、とりわけクラヴィシンバルムがその考察の手がかりになるという。チェンバロはいつチェンバロとなったか、ジャックが今日の形になったのはいつか、今回の講座でその軌跡を辿った。

会場には氏製作の楽器5台、A・アルノーの凶面(1440年頃)に基づきアクション復元されたクラヴィシンバルムとその実用改訂版、ドゥルチェメロス、クラヴィツィテリウム、プサルテリウムが置かれた。参加者は熱心に各楽器のアクションを観察し、講座でチェンバロ奏者吉見伊代氏による演奏も行われ、その夢のような音色を楽しんでいた。

講座では資料として久保田氏直筆の美しい年表やアルノー凶面等が配布され、アルノーアクションやジャックの巨大模型も登場し、その動きを具に見ることができた。アルノーアクションはタンクやツメ等が見られるものの、傘の柄のような独特の形をしている。1480年頃にはクラヴィツィテリウムが、1489年の祭壇画に描かれた楽器にはジャックレールらしきものが現れ、その後、イタリアで大量生産が始まった。久保田氏は最後に、百年戦争等の歴史背景を交えてこのアルノー凶面が書かれた経緯に触れ、講座を締めくくった。歴史の中でのチェンバロの姿に今一度想いを馳せたひと時であった。(MN)

♪ クイズ・チェンバロン！

おそろおそろ足を踏み入れたサロンには、ゆったりとソファが置かれ、リラックスしてクイズを解くにはぴったりの部屋だった。解答用紙と筆記用具が配られ、おもむろにテレビ画面から動画の再生がはじまる。

・・・ゆるい、ゆるすぎる。

チェンバロ先生とプレクト・ラムちゃん(羊)の師弟愛(?)あられる掛け合いによりクイズは進行。映像の問題では、まったく関係のないBGMが思考の邪魔をし、音楽に集中しなければならぬ問題では、かわいすぎる動物の映像が流れ、集中できず異次元世界へ連れていかれる。動画を制作した加屋野木山氏の思うつぼにはまり、翻弄される30分間。しかし問題の内容自体はいたって真面目。チェンバロを愛する人にはたまらな

い出題となっている。逆再生の音源から曲名をあてる問題にはびっくりしたが、手の動きや和声からなんとか犯人（答え）に結びつくヒントを探し出し、推理することができるのだ。なんのこっちゃと思う方は、ぜひ協会公式 YouTube チャンネルでクイズ・チェンバロン！をお楽しみください。目指せチェンバロ博士！ (NM)

♪ レセプションルーム

今年は2日間とも晴天に恵まれ、中庭に面した窓一面の景色が和やかな時間を演出していた、松本記念音楽迎賓館1階のレセプションルーム。株式会社ユニヴァーサルによる輸入CD、アカデミア・ミュージックによる楽譜、出版物、日本チェンバロ協会による会員CDやオリジナルグッズ販売ブースが出店した。中でも初登場となった岡田龍之介氏、加久間朋子氏、阿部等氏

による「チェンバロ・カフェ」は大盛況であった。吟味したコーヒー豆の良い香りが部屋中にたちこめ、濃密な講義、演奏会後の充足した脳に心地よい休息を与えてくれる。演奏家、製作家、愛好家がそこここで旧交を温め、新しい出会いがあり、チェンバロを愛する者たちの話題が尽きることはなく、まさしくこれが、「垣根をとり払いチェンバロを愛する者たちのチェンバロ・カフェ」であるという光景であった。一日目夕方からは懇親会が開かれ、久保田チェンバロ工房チームと、こちらもまたチェンバロを愛するイタリアンレストラン「インボスコ」のオーナーシェフの協力により、美味しい料理に舌鼓をうちつつ今後のチェンバロ界の発展を願う和やかな会となった。地方からの参加者も紹介され、このような会を通して、地方でも垣根をとり払った集いが開催され発展していく種が蒔かれていくことを願うものである。 (NT)



♪ フリーコンサート

恒例のフリーコンサートは、Aホールにおいて2日目の午前10時より行なわれた。出演者とお客様を合わせると34人の参加であり、ますますの盛況だった。今回の特徴としてはアンサンブルが5組と多かった事と、クラヴィコードが加わった事だ。ソロの曲はイタリアものではフレスコバルディ、フランスものではフランソワ・クーブラン、デュパール、デュフリ、ダンドリュエであり、また、今回のレクチャーやコンサートで多く取り上げられたフローベルガーに加えて、フィッシャー、J.S. バッハ、並びにパーセル、ヘンデルと多岐にわたった。また、アンサンブルにおいては歌とチェンバロが3組と多かった。今回はチェンバロ+1名という人数制限があったので、オブリガートチェンバロを含むソナタ類は一つの良い選択肢となった。なお、運営上困難もあるのだが、人数制限を見直して、ガンバ、チェロあるいはテオルボのような持続音を含んだ通奏低音、それに歌やメロディー楽器を加えたアンサンブルであれば、お客様はもっと楽しめるだろう。また、例えば歌の歌詞の対訳を出演者より事前に頂いてプログラムに入れる等、工夫すると良いかもしれない。いずれにしても、来年はもっと多くの方が参加され、楽しいコンサートになることを期待したい。(AY)

♪ 大岩みどりレクチャー

Bホールでは、大阪からオルガン・チェンバロ奏者の大岩みどりさんを迎えてレクチャー・コンサートが開かれた。大岩さんは、初期イタリアの鍵盤音楽に関する鋭い論考を次々発表なさっている方である。

レクチャーは、フレスコバルディの鍵盤曲集全6巻がそれぞれ誰に献呈されたか、という話に始まった。リチェルカーレなど伝統をふまえた対位的な作品は枢機卿など時の権力者、新しい書法によるトッカータ集は演奏・作曲に優れた腕前をもつ貴族に捧げられたという。この鮮やかな二分は作曲家の処世を物語る。大岩さんは、当時のイタリア語文献を紹介しながら、等身大の作曲家像を浮かびあがらせた。トッカータに見られる新しい書法については、「作曲と演奏の絶え間ない相乗効果」という、本質に迫る一言が印象に残った。その言い方を借りると、この60分は「演奏と音楽学の絶え間ない相乗効果」による充実のレクチャーであった。

満員の聴衆の中には、第一線のチェンバロ、オルガン奏者のほか、関西や東北から見えた熱心な専門家、愛好家の姿もあった。

その一方、この日、初めてチェンバロに接した方がおられたら、レクチャー全体の要旨を把握するのは、難しかったかもしれない。しかし、「相乗効果」による心躍るような面白さは、十分味わっていただけたと思う。(坂由理)

♪ 梅津樹子コンサート

チェンバリスト梅津樹子氏によるコンサート「フローベルガーとルイ・クーブラン、そしてデュフリまで」が開催された。梅津氏はパリで勉強され、フランス国立地方音楽院を荣誉賞付きのディプロマを取得して卒業した。このコンサートでは、フランスでの自身の経験などのお話も交えながら、魅力あふれる演奏で古き良きフランスのレパートリーを披露された。最初に、ルイ・クーブラン作のヘ長調の組曲（プレリュード、アルマンド・グラヴ、クーラント、シャコンヌ）を演奏された。松本記念音楽迎賓館所有のフレンチタイプのチェンバロの甘美な音色と、そして梅津氏によって紡がれた繊細で美しい響きが、杉の木の香る部屋いっぱいにはやさしく満ち溢れた。ノンジュレのプレリュードを初めて耳にした聴衆もあったようだが、鮮やかに温もりのある響きを全員で楽しんだ。続いてフローベルガー作のイ短調の組曲が演奏された。この作品は、「憂鬱を紛らわすためにロンドンで作られた哀歌、ジーク、クーラント、サラバンド」という楽章構成でジークが内側に置かれ、サラバンドで終了する、というフローベルガー自身による構成のみで演奏された。音楽のレトリックに寄り添った巧みな演奏表現によって、瞑想へ誘われるようなひと時を愉しんだ。最後にデュフリ作の八長調の組曲から抜粋で、アルマンド、ラ・ブーコン、ロンドが演奏された。梅津氏のお話の中で、「フランスで“デュフリなんか弾くの？もっと他の曲を弾けば良いのに！”と言われてしまった事があった」と話され驚いたが、真心に溢れた素敵な響きに感激した。(MY)



♪ 栗形亜樹子レクチャー&コンサート

最後は栗形亜樹子氏によるレクチャー&コンサート「フローベルガーのアルマンド〜修辞学的側面を探る」だった。16時30分スタートにもかかわらず、ホールにぎっしり並んだ椅子がほぼ埋まり、聴衆がいかに楽しみにしていたかがわかる。にこやかな表情で颯爽と登場した栗形氏は、簡単な挨拶のあと、軽やかな演奏を披露、一流の奏者が目の前で演奏しているにも関わらず和やかな空気が流れるような雰囲気は、この「チェンバロの日！」ならではであろう。背後できらめくステンドグラスもあいまって、聴衆は一気に別世界へタイムスリップした。はじめの演奏後は、いくつかの譜例を載せた資料を用いて修辞学の解説。熱心に耳を傾け、メモをとっている方も多かった。想像をかき立てられる標題をもつフローベルガーの作品だが、音型による登場人物の行動を音型と照らし合わせたり、上行形や下行形、アルペジオや和音の種類は、テレビ音楽を例にあげて説明。不協和音が痛みを表し、不安定な和音の印象は現代と同じ、とのお話にて、聴衆もさかんにうなずいていた。FbWV627では、手稿譜 SA4450 をもとに栗形氏が訳した26の事象を「事象を語る部分は楽器より練習しました」と笑いをとりつつ演奏。一律の印刷楽譜を見慣れた我々には、作曲者の筆運びが分かる手稿譜は当時のエネルギーが感じられ、感慨深い。しばしタイムスリップを楽しんだ贅沢な時間はあっという間であった。(桃井千津子)

♪ ペーパークラフトのミニチュア・チェンバロを作ろう
「チェンバロの日！」は毎年楽しみに参加しているが、今年は初めてチェンバロのペーパークラフトを体験した。部屋に入ると、子供たちがせっせとチェンバロを組み立てている。「ペーパークラフト」といって、夏休みの図画工作を思い出す。まあ、単純だろうと思った。ただ、始めてみると、意外と奥が深い。もちろん、簡単に組み立てられるように作られてはいるが、綺麗に仕上げるには集中力と戦略が必要だ。特に、チェンバロ側面のカーブが難しい。きつく貼り付けるとシワになり、ゆるすぎると微妙な隙間があいてしまう。できるだけ上手く作りたかったから、糊付け前に何度もシミュレーションをして貼り具合を確認していた。そうしてしばらく格闘していると、その場にいたスタッフが、「このカーブの作り方は、実際のチェンバロ製作と結構似ているんですよ」と一言。なるほど。実際にチェンバロを作るのは難しいが、このペーパークラフトで、疑似体験ができるということか。ただの工作と思いきや、以前よりもチェンバロの構造を深く知ることができた気がする。そして、組み立て終えたら、マスキングテープで外側を装飾する。そのときは私以外にもう一人、大人が参加していたが、二人してどれだけ「本物」っぽく仕上げるか、大真面目に考えた。フレミッシュの型だからフレミッシュの装飾？それとも、気にせずフレンチの装飾？想像がどんどん膨らむ。演奏を楽しむだけではなく、たまには手を汚す工作もいい。また機会があれば是非参加したい。(EY)



来年の「チェンバロの日！2017」は

5月13日(土)、14日(日)
於：松本記念音楽迎賓館

の予定です。どうぞお楽しみに！

第 19 回例会報告 「目指せ！歌う“コンティヌオ”」チェリストからの提言

2016/3/27 千駄ヶ谷 3F 音楽室

2015 年度「通奏低音講座シリーズ」の2回目として、現在日本で最も忙しいと思われる通奏低音チェロ奏者の懸田貴嗣氏を講師に迎え、コレッリのヴァイオリン・ソナタ op.5 を題材に大変有用なお話を伺いました。

前半は「チェロの歴史」と称し、コレッリ時代のバス・ヴァイオリンの話をしていただきました。16 世紀初頭から記録上に登場するヴィオローネが 17 世紀のイタリアでどのように発展し、ヴィオロンチェロが登場してくる背景などを解説、続いて最近の興味深い論文であるマルク・ファンズヘーウヴェイクの論文などからコレッリ演奏における考察を紹介されました。当時通奏低音には大型の楽器が、コンチェルト・グロッソなどのソロには小型の楽器が使用されていた可能性がある事、調弦法もスタンダードなものがなかった事、1つのアンサンブルの中で多種多様な演奏方法が混在していたらしい、結局のキーワードは「多様性」、今の流行りで言うなら「ダイヴァーシティ」というわけです。

後半は懸田さんの経験に基づいた本音での提言を頂こうと、演奏希望者を募り（4名の応募がありましたが当日は3名のみ参加）、コレッリの作品5-3のソナタの1、2楽章の指定された部分を懸田さんと一緒に弾いて頂くコーナーを作りました。

拍の表裏の表現方法、ゼクエンツや繋留での和声感をどのように出すか、などの具体的なご指導があり、3名ともアマチュアの方でしたが良い反応で対応されていました。

鍵盤楽器以外の演奏家による例会は初めてでしたが、客観的な視点を持つためにも貴重な機会だったと思われれます。今後も是非このような企画を考えたいと思います。（兼形亜樹子）

“どのような形でコンティヌオでしたのか？”というお話から始まり、チェロの歴史～コレッリの時代のバス・ヴァイオリンについて、また多様性についてご講義頂く事ができました。チェリストの先生からのお話と共にチェンバリストの先生方からの質問やアドバイスも大変貴重で勉強になり、通奏低音の奥深さ、色々な視点から通奏低音を学んでいくことの大切さを感じる事ができました。

このような機会を設けてくださり感謝しております。ありがとうございました。（Y）

第 19 回例会



第 20 回例会



THE 鍵盤フェスタ！



第 20 回例会報告「フレスコバルディ - その拍子記号とテンポの考察」

2016/7/16 千駄ヶ谷 3F 音楽室

昨秋、好評を博した久保田慶一会長による「『記譜法の歴史』刊行記念講演会」に続いて、7月16日（土）、初期バロックの拍子記号とテンポについてのレクチャーが行われました。

先の例会が総合編、理論編とすると、今回は的をしぼった実践編といえます。講師の福島康晴氏は、歌手、指揮者としての豊かな演奏経験を踏まえ、テンポの理論を明快に説明されました。16、17 世紀のイタリア語文献を丹念に読んだ上での解釈は、説得力あふれるものでした。質疑応答の時間には、モンテヴェルディの「聖母マリアのタベの祈り」や「オルフェオ」につ

いて、参加者から積極的な発言があり、大変中身の濃い例会となりました。（坂由理）

チェンバロを習い始めて5年ほど経ちます。最近一番悩ましいのは、「この曲はいったいどうやって弾けばいいの？」ということ。ピアノ曲の場合は、たとえばラヴェルのスカルボを例にとるまでもなく「どう弾く」以前に「弾けませんっ！」という曲が多いのですが、チェンバロ曲では「弾けません」はそれほどないかもしれませんが、それよりも、「いったいこれはど

ういう曲なんだろう？」と立ち止まってしまうことが多いです。フレスコバルディがまさにそれで、いったいどうやって拍子を数えるのか、数えようとすればするほど混乱してしまいます。最近ではYouTubeなどで安直にさまざまな音源を聴くことができますが、これも聴けばきくほど、ますます分らなくなる。ポリーニとシフのベートーヴェンは違うというレベルじゃないですから。それで、最近やっと気づいたのがフレスコバルディさんに聞いてみようということですが、しまったイタリア語がわからなかった…というオチになります。チェンバロ協会の講座で大岩先生、福島先生のお話を連続して聞くことができたのは、この混乱からの解決法を考える上で貴重な経験でした。お二方とも、当時のイタリアの楽譜、文献を直接引用してのお話であったということが、たいへん説得力がありました。特に、福島先生のお話の中で、あまたの解説書を

読むのではなく、当時の文献にあたって最終的には自分で考えなくてはならないとおっしゃっていたのは、とても感銘を受けました。私は本を読むのは嫌いではないので、解説書の類は何冊も読んでいたのですが、どうも最後のところでストンと落ちてこない。でも、福島先生が訳して下さい「カブリッチョ序文」を読むと、「なるほど、そういうことか！」と思えるのです。本人のことばの重みとでもいいたいでしょうか。解説書というのは、どうしても抽象的になって肝心のところ「なぜ、そうなのか」が抜け落ちていることが多いのです。今回の例会は、実際に歌ってみたり、拍子をとってみたり、作曲家のことばに触れたりして、まさに当時の音楽を「体験」できた実り多い時間でした。未消化な部分も多い（黒色の音符が出てきた段階でギブアップ）ので、続編を期待しております。また、日本語訳もよろしくお願いいたします！（金澤和子）

協会後援行事報告

「第2回 THE 鍵盤フェスタ！パイプオルガン・チェンバロ・ピアノ ～ あなたはどのケンパンが好き？」 2016/7/31 松本市音楽文化ホール

演奏：原田靖子（パイプオルガン/音楽文化ホール専属オルガニスト）、渡辺かおる（ピアノ/松本市在住）、
栗形亜樹子（チェンバロ/音楽文化ホール チェンバロ講座講師）
楽器展示：久保田チェンバロ工房（埼玉）

夏休みが始まって間も無い晴天の土曜日の午後、長野県は文化都市で知られる松本の音楽文化ホールに於いて、去年に引き続き「THE 鍵盤フェスタ！」がホールの主催事業として開催された。こちらは“ザ・ハーモニーホール”の名でも知られており、音響の良さでは定評のある693席のメインホールと180席の小ホールに、パイプオルガン2台、チェンバロ1台を備えている。ピアノは言わずもがな、多数のメーカーの名器を所有している。

去年は初の試みの開催であり、各楽器の演奏体験、オルガン内部探検ツアー、コンサート（子供対象・大人対象の2回）などを全て入場無料で行い好評を博した。今年はさらに大規模なチェンバロの展示とデモンストレーション、ピアノの調律師鈴木日出夫氏のお話つき「ピアノの歴史」スライドショー、チェンバロのペーパークラフト製作などの新企画をプラスした。また託児所、前庭での喫茶軽食コーナーも設け、半日にわたってホール全館を解放する形式で行った結果、去年より多い550名（うち半数以上が小学生以下の子供）の参加があった。

12時開場の前に既に並んでいる親子連れも多く、一家全員で来訪して楽しんでいる様子が見られた。「去年楽しかったのでまた来ました」という声も聞かれ、是非今後も定着して欲しいイベントである。

特筆すべき贅沢は、埼玉の久保田チェンバロ工房による8台の楽器展示と久保田氏の解説付きデモンストレーションだったであろう。メインホールロビーにすらっと並べられたプサルテリウム、クラヴィツィテリウム、クラヴィコード、チェンバロ、ヴァージナル、フォルテピアノは全て試奏も可能。松本市で一度にこれだけの展示は多分初めてではなかったか。チェンバロの歴史を実物の楽器を通して知ることが出来るという、滅多にないチャンスであった。

またホール設置の大オルガンの、最大と最小のパイプの模型（何とホール職員による段ボール紙の手作りであった！）やオルガン内部の説明パネルも展示され、ロビーには常に人が溢れていた。久保田工房の久保田みずき氏にはチェンバロのペーパー模型を製作する丁寧な講座も行って頂き、こちらも親子など35組の参加があった。日本チェンバロ協会のグッズ即売コーナーも設けられた。

コンサートは約2時間、親子連れも気おくれする事なく参加できるように入退場がいつでも自由。オルガン、ピアノ、チェンバロと各楽器の紹介を兼ねたソロ演奏の後、3楽器の聴き比べを兼ねてバッハ、モーツァルトを合奏用に編曲したものを演奏した。体験コーナーは前もって20名を募り、全員が、普段は

触れられない3つの楽器（チェンバロ、パイプオルガン、コンサート用グランドピアノ）を各2～3分試奏できるよう、3グループに分けてホール職員がツアーさせる。楽器のそばではもちろん我々演奏家がアシスト、アドヴァイスしながら弾いて頂く。小学生から大人まで参加者の年齢層は幅広く、皆普段ピアノで弾いている楽譜持参で楽しんでた。去年同様早々に予約は定員になったという。

ホールのオルガンを一般解放する企画は全国的にも珍しくないが、チェンバロ、ピアノも一緒に全部体験できる企画はそうないだろう。将来的にはピアノフォルテのコンサートやポルタティーフオルガンの展示なども出来ればと考えている。最後に久保田工房の皆様、何よりもスタッフ総出で準備、当日の運営をスムーズに運んで下さり、こちらのわがままも全て聞き入れて下さった松本音楽文化ホールの職員の皆様に、紙面を借りて心からお礼申し上げたい。このイベントの今後の息の長い継続と発展を祈るのみである。（栗形亜樹子）

夏の始まりを思わせるすっきりと晴れた7月の終わり、高速バスにて車窓より富士山を眺めながら松本へ向かいました。目的地、松本市音楽文化ホールに到着し、開放的な吹き抜けのメインホールロビーに入ると、すでに大勢の子供たちを含む観客が久保田チェンバロ工房の「チェンバロとその仲間たち」（ご先祖様のプサルテリウム、中世フランスクラヴィシンバルム、クラヴィコード、フランドル様式ヴァージナル、初期イタリアン、ルッカーモデルの二段チェンバロ、クリストフォリのフォルテピアノ）を囲んで興味津々で見入っていました。栗形亜樹子氏のデモンストレーションと久保田氏の解説付きの贅沢な楽器紹介！！新しいおもちゃを発見したようなキラキラした目で見つめる子供たち。楽器を見て、触って、聴いて、五感で体感するこの瞬間を大人になっても思い出して欲しい、と願いを込めながら見守りました。

パイプオルガン、ピアノ、チェンバロ3台での珍しいコンサートは、各楽器の紹介と楽器の特徴を表す短い曲の構成で、初めて楽器を知る人にも非常にわかりやすく、またパイプオルガンは演奏中の足鍵盤を大画面に映し出すなど、飽きさせない工夫が随所に散りばめられていました。3台での演奏では各楽器の特性を生かしつつ、音色の違いを比較できる興味深い構成になっており、観客を最後まで惹きつけ飽きさせません。音量のバランスを心配しましたが、そこは編曲の妙でカバー。なんとといっても、子供たちの純粋に楽しんでいる笑顔と好奇心が生まれていることが素敵でした。（高橋ナツコ）

あっという間に1年が経ってしまった。昨年の4月26日に有賀のゆりさんの訃報を聞いてから、追悼文をとお話をいただいたのだが、書き始めることがなかなか出来なかった。時間的に忙しかったということもあるけれど、どのようにまとめたら良いかな…と、いつも頭の中でグルグルとしていた。私は有賀氏とお会いしたのはほんの数年前で、教え子でもなく、深く関わったわけでもないもので、直接のお弟子さんや親族の方々に申し訳ない気もしていた。お会いしたのは、日本でのチェンバロに関する史実に興味があり、色々調べていた中で、どうしてもお話を伺っておきたかったからである。と同時に、私の叔母（詳しくは父の兄のお嫁さん）と同志社で同期だったもので、関西にこういう方がいることは早くから聞いてお名前は存じあげていた方でもあった。

日本でのチェンバロに関係する方々を調べるうちに、大変素晴らしい方であったことに気づく。チェンバロ奏者として海外で勉強し帰国した第1世代のお一人であったのだ。その辺りとその頃の事を伺いたく、連絡を取らせていただいた。運良く、京都の住居を改装している間、東京に滞在されているのがわかり、訪ねることとなった。そのような関係でお聞きしたお話はやはり、日本チェンバロ協会の記事として残すことが追悼の意味にもなるかと感じ、ここに記そうと思う。

2011年であったと思う。大変暑い日、緊張しながら訪ねたマンションで、大変お優しい笑みを浮かべた有賀氏にお会いし安堵、叔母のことも逆に私の名前から思い出されたのか、先に尋ねられ、懐かしそうに同志社女子専門学校時代のお話から始まり、叔母との思い出など伺うことになる（叔母はなかなか切れ者で、怖い存在だったらしい…知らなかった）。その後は、卒業後渡米、オッタハイン大学音楽学部ピアノ専攻を卒業、ノースウェスタン大学の大学院研究科で音楽史を専攻したそうで、そこでバロック時代の音楽に深く興味を持ったそうである。さらにユニオン神学大学で教会音楽を学び、一旦帰国。すぐ後に、1960～63年ドイツへ渡りフライブルグ国立音楽院でチェンバロをフリッツ・ノイマイヤー教授に、そして驚いたことにピアノをエディット・ピヒト＝アクセンフェルト教授に師事したという。その間、フンボルト奨学生としてフライブルグ大学音楽研究



科でバロック音楽の研究に従事。この当時は船で留学先へ移動で、帰国には多くの場所をめぐる客船を使ったために、忘れられない思い出が多く出来たんです…というお話は、今も氏の楽しげなお顔と共に思い出される。帰国後1964年に開催したリサイタルを皮切りにヴェンツィンガー、ゴールウェイ、リンデなど多くの方と共演。この頃はモダン・チェンバロが台頭していた時期でもあり、有賀氏は、ドイツでアクセンフェルトの推薦もあって特別に1963年に注文した楽器、ザスマン社製の16,8,8,4の、足ペダルではなく手動のストップの楽器を所有し活動。その後はヒストリカル仕様の楽器を所有し、同志社女子大で教授として精力的に活動されていた。ご自分で仰っていたことだけれど、「私の演奏の特徴を一つ挙げるとすれば、音色だと思います。なぜなら、それが一番大事だと思うのです。音に全てが表れるので」と。非常に印象的でした。

そのようなお話を伺い、また日本チェンバロ協会設立時期とも重なって、その後も電話をしたり京都のお宅へ訪問したりと親密な交流が始まった。有賀氏は関西地域で最初のチェンバロ奏者として帰国したことから「ごめんなさいね、私がこういう協会を設立すべきだったのに…」と話されることもあった。足が不自由な氏は、お宅に伺うと、車椅子を押してくれば外に行けるのでお食事に行きましょう！とお誘いくださることもあった。湯葉料理が大変美味だった。また、一度体調を崩された後お電話をくださり、お願いがあるという。よくよくお話を聞くとドイツから持ち帰ったザスマンのモダン・チェンバロのこれからについてで、どこかで使用、もしくは引き取っていただいで有効活用してくれるところはないかと、このままでは破棄しかないと大変心配しているということをお話された。そこで、考えた上、浜松の楽器博物館へ問い合わせたところ、「寄贈という形でこちらにいただくことは可能です」というお返事をいただき、大変喜んでいただけた。寄贈後、協会の催しで浜松を訪れた際、展示されていなかったのが、気がかりではある。モダン・チェンバロをきちんと修復していただき、演奏会でも使用していただくのが、有賀氏の想いだったと思う。寄贈前に有賀氏と共に自宅の近くに預けてあるこのチェンバロを見に行ったら、車椅子に乗りながら愛おしそうにパッサを演奏していた有賀氏の姿は今も目に浮かぶ。

その後も気になりながら、連絡がないな…と思った矢先の訃報であった。もう一度お会いしたかった。今もどこから、その楽器のこと、何台も所有されていたオリジナルタイプの楽器たちの行く先を見守っていることと思う。1年経ってしまったけれども、有賀氏との短かったけれども中身の濃かった時間に感謝すると共にご冥福をお祈りしたい。



日本チェンバロ協会
Japan Harpsichord Society

会報第7号 2016年10月10日発行 発行人：久保田慶一
編集：加屋野木山、高橋ナツコ、山縣万里、山本庸子

日本チェンバロ協会事務局

住所：〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1丁目44-4 1階
電話：080-9661-8196（火曜日 10時～17時に対応）
メール：japan.harpsichord.society@gmail.com
ホームページ：http://japanharpsichordsociety.jimdo.com

